



TITLE:

# 社会的に妥当なる農業経営規模に関するベルンハルディの見解

AUTHOR(S):

八木, 芳之助

---

CITATION:

八木, 芳之助. 社会的に妥当なる農業経営規模に関するベルンハルディの見解. 経済論叢 1933, 36(1): 38-56

ISSUE DATE:

1933-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130274>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟叢論

第一號

第三十六卷

昭和八年一月一日發行

## 新年特別號

インフレーションと財政策	法學博士 神戸 正雄
人口に關する小論	文學博士 高田 保馬
社會的に妥當なる農業經營規模に關するベルンハルデイの見解	經濟學士 八木芳之助
操短と生産費	經濟學士 大塚 一朗
資本論と一般均衡論	經濟學士 柴田 敬
中央銀行役割の發展に就いて	經濟學士 松岡 孝兒
預金通貨の貨幣的性質に就て	經濟學士 中谷 實
ケトラー直後の英佛統計學	法學博士 財部 靜治
土佐の育子策について	經濟學博士 本庄榮治郎
爲替心理説の批判	經濟學博士 谷口 吉彦
宇和島藩の蠟專賣	經濟學士 堀江 保藏
琉球農村共同體 <small>と我國民理想としての</small> 「國民共同體」	經濟學博士 石川 興二
地方財政の改革	經濟學博士 汐見 三郎
漁業組合論	經濟學士 蟠川 虎三
二つのインフレーション	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁 轉 載）

## 社會的に妥當なる農業經營規模に關する

### ベルンハルデイの見解

八木芳之助

農業上に於ける社會的に妥當なる經營規模如何の問題は、從來に於ては大農小農の優劣問題として、多くの農業經濟學者によりて取扱はれて來た。この論争の發端は、啻に古典學派、重農學派に留らず、實に遠く官房學派や重商主義者にまで溯るものである。一八九八年カウツキーをして「大農小農のいづれが有利なりやの論争に就ては、一世紀、否もつと以前から國民經濟學者達が没頭し、その議論は何時果てるとも見えない。併し理論家が大農小農の優越に關して論議してゐる間に、農業は異常なる發展を遂げ、その發展は議論の餘地なきものであり、穿鑿するまでもなく明瞭なものであつたと云ふことを少しも妨げなかつた<sup>1)</sup>」と論じてゐるに拘らず、この論争は今日に於ても尙ほ終局的決定を見るに至つてゐない。この事は近年チャヤノフが大農小農の優劣問題に關して、「三十年に互り理論上の争ひが繼續された事、竝に農業の事實上の發展に於て經營の大きさが甚だ不確定である事よりして、この問題が如何に紛糾せるかが窺ひ知られる。而か

1) Karl Kautsky, Die Agrarfrage, 1899, S. 5.

も其の到達した結果は少しも決定的なる斷定を與へてゐない<sup>1)</sup>と言へるに徴しても瞭かであらう。しかも吾人の眼前に展開される事實は、小農經營は滅び去るところか、大經營と相竝んで依然その存在を維持してゐるといふことである。

一九二二年小農論者ダビッドは「當時甚だ熱烈に論議された理論上の論争、即ち小農經營は生存し得るや否やの問題は、農業經營統計によりて決定的に回答された。小農民は沒落しない。否それどころか小農民は、政治的に鉤着せられたる大地主の特權や優越によりて道が遮られてゐないところでは、何處に於ても其の人數と面積とに進歩をなしてゐる<sup>2)</sup>」と高唱して、小農の優勢に凱歌を挙げたのであるが、農地の細分化が激しく行はれる場合に於て、しかも土地所有と經營とが分離するを普通とする處に於ては、小農は果してダビッドの謳歌せる如く、自作農としての特徴を常に維持し得るであらうか。小農の存續は、チャヤノフの主張する如き特殊なる心理的打算によるか、またはダビッドの主張する如き農業の有機的生産といふ技術的特殊性によるかは、之を穿鑿せずとするも、今日の交換經濟の下に於ける小農の運命は、ダビッドの主張する如く、しかく、安慰的なものであらうか。また我々はチャヤノフに従て、主として自家勞働に依存する所の小農の勞作經濟たる特殊性を認め、しかも小農經營の目標は純利潤の獲得よりは、寧ろ自家勞働に對する最大報酬の獲得であり、またアエレボ<sup>3)</sup>の言ふ如く、小農の目標は農業者と其の家族の完全なる慾望充足であるとするも、問題は小農に於て、かかる自家勞力に對する最大報酬、完

- 1) Tschajanow, Die Lehre von der bäuerlichen Wirtschaft, 1923. S. 5.
- 2) David, Sozialismus und Landwirtschaft, 1924. S. IV.
- 3) Aereboe, Allgemeine landw. Betriebslehre, 1922. S. 7.

全なる欲望充足が、今日の資本主義經濟組織の下に於ては、如何なる生産關係を通じ、又如何なる市場關係を通じて行はるるかにある。即ち土地の所有者と勞働の擔當者とが分離せる農業生産關係の下に於ては、農業收益たる地代の取得關係の如何は、やがて小農たる小作農の欲望充足の程度如何を決定する一要因となり、生産物の商品化の道程に於ても、小農經濟と資本の獨占的傾向との對立關係の如何、農家に於ける生産物販賣、必需品購入上に於ける中間商人の搾取關係の如何によつても左右されるを免れない。されば問題は假に小農は小農として存續するとしても、それが質的變化を遂げて、自作農は小作農に沒落し行かざるや否や。また小農が小農として存續するにしても、其の生活内容が維持され向上され得る可能性があるか否かに存してゐる。

遮莫、今日何れの國に於ても小農は大農と並び存してゐる。この事實自體は私を驅つて、大農小農の優劣問題に導く。特に私は此の係争問題について、獨逸の舊歴史派に屬するベルンハルデイの所説を紹介吟味し、故を温ねて新を知る一助たらしめたい。嘗て那須博士はベルンハルデイの説を紹介され、「ベルンハルデイの意見は、巨大經營及び過小農の弊を論じて正鵠に當れりとなすべく、又彼れが各種經營規模の分配は國民經濟的純所得を最大ならしむるように、且又多種多様の農産物に對する需要を充し得るように定むべしと主張したことも卓見と稱すべきであらう。余は單に國民經濟的純所得を考ふるのみにては尙不充分であつて、之に加へて此の最大純所得を擧ぐるに際しての勞働條件、及び之に必然的に附隨すべき社會的事情等をも併せて考慮

せねばならぬことを信するものであり、少なくとも國民經濟的純所得を考ふに當りて單に物財の消耗のみを考へずして勞働の痛苦等の心理的要素をも考慮に入るべきものであることを思ふものであるが、此等の補正を加へ、又最大純所得は可及的永續性のものを指すと解釋した上に於てベルンハルディの説に賛成したい<sup>1)</sup>。と論ぜられてゐるに徴しても、ベルンハルディの所說の問題とするに足ることを知るであらう。

## 二

一八四九年ベルンハルディは其の名著「大所有地及び小所有地に關する諸論證に對する一批判の試み<sup>2)</sup>」の卷頭に於て、「國家又は社會にとりて、土地が大規模に比較的少數の所有者に分配されてゐるのが、國家及び國民經濟關係よりして、有利であるか、若しくは遙に多數の家族に所有地を賦與し、從て恐らく多數の人々をして農業に従事せしめ、最も直接なる關心を確かに持たしめるやう、また遙に大部分の國民をして孜々たる勤勉を農業に注がしめるやう、土地を多數の小所有地に分配するのと、全體として、何れがより大いなる利益を與ふるか<sup>3)</sup>」の問題を提起し、しかも此の問題の研究は、從來とても國民經濟學に關する如何なる論著に於ても回避されたることなく、從て必然的に常に繰返し論及されざるを得ざるものなるが、それに拘らず未だ決定的回答を告げてゐないと論じてゐる。

私は此の點に關するベルンハルディの積極的見解を明にするに先ち、先づ第一に彼は大農地又

1) 那須皓氏、農村問題と社會理想、二八八頁

1) Theodor Bernhardi, Versuch einer Kritik der Gründe, die für großes und kleines Grundeigentum angeführt werden. St. Petersburg, 1849

2) Bernhardi, a. a. O. S. 1.

は小農地を以て何を觀念したるか、即ち彼によれば大農小農の區別は何を標準として之を打ち立てられたるかの點より吟味して行こう。

從來英吉利及び獨逸に於ては、大農及び小農を區別するに單なる耕作面積を以てするを普通とした。即ち獨逸に於ては三〇モルゲン迄の農地を小農、三〇乃至六〇モルゲンの農地を中農、六〇モルゲン以上の農地を大農として取扱はれて來た。英吉利に於ても農政學者は好んでかかる面積による分類を試み、かの有名なるアーサー・ヤングは三〇エーカー迄の農場を小農とし、五五乃至八八エーカーの農場を中農又は大農場としており、その後シンクレアーは一〇〇エーカー以下の農場を小農、一〇〇乃至三〇〇エーカーの農場を中農、三〇〇エーカー以上の農場を大農と呼んだ。<sup>1)</sup>ベルンハルデイはかかる農地の面積といふ謂はば量的標準によりて、大農及び小農を區別するの無意義なることを論じ、かかる區別の不合理なることは、獨逸の南部と東北部とを比較することによりても明らかであり、南獨逸に於て大農場と呼ばれる面積も、東北部に於ては辛うじて一農家の生活を支ふるに足る小農場たることを論じ、假令一家族が耕作し得る農地は之を小農と呼ぶも、しかも「一家族が耕作し得る面積は、先づ第一に土地それ自體が重土であるか又は輕土であるかにより、次に粗放經營か集約經營の何れかを選ぶべく制約する一般諸關係によりて自ら異なる」ことを瞭にし、<sup>2)</sup>彼は寧ろ積極的に農業經營の質的標準によりて大農及び小農を區別すべき旨を提唱してゐる。

1) Bernhardi, a. a. O. S. 26.

2) Bernhardi, a. a. O. S. 17.

ベルンハルディによれば、(一)農場の所有者が之を他人に賃貸し、従て企業利潤は之を放棄するも、その地代收益を以て、其の所有者及び家族に獨立地位と上流階級としての裕福とを保證する場合には之を大農と稱する。故に大農の特徴は、企業利潤を放棄するも又之を取得するも、所有者の社會的地位や生活狀態に實質的影響を及ぼさざる點に存してゐる。(二)次に農場の所有者がその家族の福利を確保するためには、所有者は必らず經營者となり、企業利潤を獲得せなければならぬ場合には、之を中農と稱する。中農は、それが齎す企業利潤が所得者にとりて有する決定的重要さによりて、大農より區別されると同時に、他方中農は、自己の勞働力をして農業的筋肉勞働に服せしむるを要せざる點に於て、小農から區別される。即ち中農地の所有者は經營の指揮監督に當るもので、自ら農業筋肉勞働に協力せざるを普通とする。蓋し如何なる場合に於ても彼が取得する勞賃は、全收益に比して些少であり、かかる附加的勞賃收入によりて其の地位は著しく改善される處がないからである。(三)最後に小農に於ては、其の所有者は必然的に農民であり、自ら農地を耕す勞働者である。蓋し小農に於ては自己及び家族の勞賃は全收益に比して決定的に重要たるからである。

かくの如くベルンハルディの大小農分類の標準は、主として農場所有者の農業經營上の勞力關係に重きを置くものであり、後年ロッシヤーが、經營者が専ら指揮監督の任に當るものを以て大農とし、指揮監督と併せて多少の筋肉勞働に服するものを以て中農とし、家族が専ら肉體的勞務

1) Bernhardt, a. a. O. S. 20-22.



に服して、その勞力を充分に利用し得べき程度の農場を經營するものを小農となしたる分類に酷似してゐる。否寧ろベルンハルデイの見解こそ、ロツシャヤーの分類に多少の影響を與へてゐるであらう。併し乍らベルンハルデイが大農を以て資本主義的大經營と解するよりは、寧ろ歴史的に存續する不耕地主たる騎士領所有者 (Rittergutsbesitzer) を念頭に置きしことは、最近リヤチエンコをして、此等の著者に於ける問題の基本的提起、同時にまた彼等の構成および論證の根本的誤謬は何よりもまづ、資本主義的大經營と非資本主義的小經營との對立を、大土地所有と小土地所有との對立によつて代へんとするにあると主張せしめてゐる所以である。更にベルンハルデイは小農を以て主として自家勞力に依存する經營形態を念頭に置きたるも、必ずしも之はチャヤノフの試みたる如き「純粹培養に於ける家族經濟」ではない。蓋しベルンハルデイは我國の故横井博士と同様に、小農經營を定義するに際し、勞作經濟に於ける若干の農業雇人の介在を認めてゐるからである。

### 三

更に進んでベルンハルデイは農地が大規模なる比較的少數の土地所有者に分配される状態を以て、當時一般に有利と考へられたる前提となる大農の利點として、次の諸事項を擧げてゐる。(一) 大農地の所有者は、必然的に所謂身分高く、富裕にして教養ある階級に屬する。而して彼等は教育を受け、多かれ少なかれ科學的智識を有し、世界何れの國の小農地所有者及び農民に就て一般

1) Roscher. Nationalökonomik des Ackerbaues (bearbeitet von H. Dade) 1912, S. 209, 210.

2) Tschajanow, a. a. O. S. 8.

3) 横井博士. 小農に關する研究. 八頁

に見出さるる如き偏見及び傳統的因襲への盲目的隸屬より解放され、從て本來その教養の結果として、農業を合理的科學的に經營する能力を有するものである。(二)大所有者の農場は、それ自體一般に良く經營されるのみならず、刻々の事情に適應する方法により、即ち凡ての事情に適應するやう經營される。その結果として、かかる方法による土地耕作は、同一面積の土地が多數の小所有地に分配される場合よりも遙に生産的である。(三)多數の有利なる農業部門が大農地に於てのみ合理的に經營される。この事は一般に牧畜、原料品の加工に就て妥當する。(四)大所有地に於ては個々の農地が分散し、所謂散圃狀態を呈すること少なきを以て、之を合理的に經營することが出来る。(五)大所有地は農業上必要とする資本に關し、小所有地に優れてゐる。即ち大所有地が產出する大なる収益のため、永續的改良に必要とする資金を容易に調達することが出来る。(六)大土地所有者が同時に農民であり、企業者たる場合には、その支配する大資本力により、不慮の災厄、戰爭が惹起する荒廢、火災、雹害、數年に亙る凶作等に對し、平年作に於てもその收穫が辛うじて家族を養ふに足る小農よりも、一層よく堪へ得る。(七)大農は小農よりも資本及び勞働力を一層合理的に又有利に使用することを得る。殊に大農に於ては農舍、農具及び役畜に對する資本支出は、小農に比して比較的に節約される。勞働力の使用に就ても、大農に於ては機械の使用、或る程度迄は分業の採用によりて、小農よりも比較的に之をより節約することが出来る。加之、大農は小農よりも、生活必需品及び生産用品を一層大量に、從て有利に購入することを得、また生

產物の販賣に際しても、大農に於ては大量に販賣するが故に、生産物の商品性を高め、資力裕なる點よりして市場の景況を察知して、小農が收穫直後に投賣りする如き不利を蒙らない。かくて大農は、同一面積の農地が多數の小所有地に分割されてゐる場合よりも、遙に大いなる純収益を擧げるものとしてゐる。

大農地はかくの如き優越性を有するものとされてゐるが、かかる優越性は必ずしも實際には常に保持されるものにあらざることは、ベルンハルディの看過せざりし所である。例へば一般に大所有地は一纏の農場として經營されると考へられるも、之はかなり我儘なる考方である。即ち獨逸の南部及び西部に於て普通とする如く、農民の聚落居住が行はれ、耕地が散圃状態を呈する場合に於ては、大所有地も一般農地と同様な交叉状態を呈するものにして、大農地が一纏めたる一農場を構成するは比較的少ないことを指摘してゐる。更に大農地の所有者は特殊なる農業勞働例へば刈取を迅速に行ふ如く、緊急の場合には勞働力を一時點に集中することによりて、小農よりもより大なる収益を擧ぐると云ふも、この際には大所有地に隸屬する賦役勞働者の存在を前提とするものにして、然かも其の場合、かかる隸屬勞働者は小農自身の如き細心なる勞働をなすものではない。尙ほまた大農地所有者は充分豊富なる資本力を有し、天災に對し大なる抵抗力を示すとされるも、寧ろ小農の方がかかる天災に際しては、家計上目立たぬ節約を行ふて、よく之に堪へ得るが、大農に於ては其の有する多數の僕婢又は日雇人に對し、仕來りの給養と支拂とを行

はざるを得ないから、反つて負債を被ることとなり、従て小農に對しては必要とせない特殊信用機關（地主金融組合の如し）を設置する必要を見ることとなる。<sup>1)</sup> かくの如くベルンハルデイの眼前に髣髴として現れ来る大農は資本主義的大經營でなく、先資本主義的巨大地所有である。大農小農の優越問題に關しベルンハルデイの所説を讚美せるスカルルワイト<sup>1)</sup>でさへも、この點につき充分なる認識を有してゐない。

#### 四

以上の如くベルンハルデイは、大農地が小農地より相對的に、多くの純收益を齎すことは、之を一應認める。併し大農地がより多くの純收益を生むといふ優越性に關する「論證の多くは、私經濟的見地から見れば實際の重要性を持つが、國家又は國民經濟的見地からするや否や、それは直ちに消滅する<sup>2)</sup>」ものである。本來英吉利經濟學者「殊にマカロックの如き學者は、出来る限り大いなる純收益の獲得を以て、最も熱心に努むべき全く唯一の目標と考へた。之に反し純收益がそれから引出される總收益の多少に就ては、それ自體、國民經濟竝に私經濟的見地の何れよりするも、全く問題とせなかつた<sup>3)</sup>」。蓋し英吉利經濟學者は純收益たる利潤の内に、凡ての經濟進歩の根據を認め、利潤を以て生産手段の改良、生産力の増進に對する唯一の手段と信じたからである。併し此の見解が正しきや否やは別問題である。蓋し純收益は大農に於て事實上大なりとするも、經營規模を變ずることによりて總所得及び國民經濟的效用を更に大ならしめ得るからであ

1) Bernhardi, a. a. O. S. 419-427.  
2) Skalweit, Agrarpolitik, 1924. S. 225.  
3) Bernhardi, a. a. O. S. 35.

る。即ち氏によれば「小農は同一の面積の農地から、それが比較的少數の大所有者に分割される場合よりも、より大なる總收益を擧ぐるものであり、しかも年々の國民總所得、年々產出される國民の富は、實にこの總收益にして、純收益ではないからであり、また國家の一般福利と實力とは此の總收益に基くものにして、純收益に基くものでない」。企業が純收益を計算するに當りては、勞賃は之を経費として差引くも、國民經濟的立場よりすれば、勞賃は寧ろ純所得の一部分をなすものに外ならない。故に大農の純收益に其の勞働者に對する經費を加へたる合計と比較するに、小農の收益に農民及び其の家族のより良好なる生活を支持するために投ぜられたる經費を加へたる總收益を以てするならば、大農及び小農の純收益の大小のみを比較したる場合と異なるであらうと主張してゐる。

かくてベルンハルデイは英吉利學派、就中リカアドウ、マカロックが純收益に重きを置いて總所得を輕視し、總所得が大にして多數人民に獨立安慰なる生存を保證する場合よりも、寧ろ資本利子の大なる場合を重視したるを批難し、生産はそれ自體が目的でなく、人間の爲めに存する手段たるに過ぎない。されば生産は之を社會に役立つやう定むべく、逆に生産に最も好都合なるやうに社會狀態を定むべきでないとする。勿論投下せる生産手段を以て最大の收益を得るやう努むべきも、併しこの場合には獲得される總生産額の出費總額に對する比率を考ふべきであつて、單に國民所得の一構成要素たる資本利子のみを考慮すべきでない。更に國民所得なるものは、任意

に相互に交換し得べき各種價值の總量より成立するものでなく、一定の法則に従て有機的に組合はされたる財貨の總體が吾人の需要する所のものである。<sup>1)</sup> 故に大農が表面上より大なる純收益を産出するも、若しこれは、他の事情が總て同一なる場合に於て、小農が産出するよりも、其の總收益がより少ないことに起因してゐるならば、かかる大なる純收益を以て大農の優越を無條件に立證する理由とするに足らないとしてゐる。

然らば若し一國の全農地が少數の大土地所有者に分割されてゐるならば、その國の農業は如何なる状態に陥るであらうか。ベルンハルディの考ふる所によれば、かかる國に於て一定割合以上に餘剩農産物を産出するには、農業人口に比して極めて多數の工業人口が存在するか、若しくは農業品は之を海外に輸出せなければならぬ。後者の場合に於ては、その國土が元來肥沃なるか若しくは肥沃なる處女地が農業者に豊富に供給され、從て耕作上僅少なる經營資本を要するに過ぎざる爲めでなく、換言すれば他の諸國より低廉に穀物を生産し、世界市場價格を以てして大なる利得を獲得する如き好都合なる立場にあるためでなく、寧ろ他の競争國に比して沃度が劣れるに拘らず、穀物を輸出せざるを得ざる所以は、其の國の國民經濟が之を強要するからであり、從て世界關係よりして其の國の土地所有者は、かなり低い純所得を取得するに過ぎないであらう。前者の場合に於ては、その國に居住する多數の工業従業者は、その國の農業人口少なきため、勢ひ其の工業製品を海外に輸出せざるを得ず、かかる國內市場を缺く工業生産は健實なる地歩を有

1) Bernhardi, a. a. O. S. 447.

するものとなし得ないとしてゐる。<sup>1)</sup>

## 五

右の如くベルンハルデイは、一國の農地が少數の土地所有者に歸屬する狀態を以て、國民經濟上有害と考ふるが、併し氏は小農に對し無條件なる賛意を表したであらうか。先づ彼は小農の利點として(一)同一地域の小農は、それが比較的少數の大所有者に分割される場合に比し、より大なる總收益を擧ぐることに、しかも國家の一般的福祉と實力とは、この總收益の多少に懸るものたることを指摘してゐる。(二)小農地は大農地に比し、自己の計算を以て働くより、多數の農家を養ふ。而して小農の家族勞働は細心なる注意、多年の經驗、郷土に對する精細なる智識を以て行はるるが故に、收益の増加を促す。(三)大農は雇傭勞働に依存してゐるから、細心なる注意と手入とを要する商用作物栽培に適せない。集約的園藝栽培は小農を俟つて始めて行はれる。(四)更に小農の支配的なる國に於ては、農業所得の分配が比較的公平に行はれることを指摘してゐる。

併し乍らベルンハルデイは一國の農地が總て小農に細分される狀態を以て、國民經濟上有利と考ふるものではない。蓋し全農地が小農に分割され、各農家は自家所要の穀物を產出するのみにして、他の職業者に對し農產物を供給する力無きに至るときは、社會的分業は停止し、社會の物質的竝に精神的發達は阻害されるに至る。即ち「小農の支配的なる狀態に比し、大農制度は特にセイの正當に指摘せる如く、同數の農業人口を以て、遙に多くの他產業者を扶養し得る點に特

1) Bernhardt, a. a. O. S. 417.

徴づけられる。反之、小所有地に於ては、同一面積上に於て、多數の農業人口と相並んで比較的少數の工業従業者又は他の職業者を養ふに過ぎない<sup>1)</sup>。しかも「各農家が辛ふじてその需要を充すに過ぎざる程に土地細分が行はれる場合には、不可避免的に野蠻狀態に導き、不可避免的に起る教養の不足、かかる狀態が惹起する萎靡せる無氣力により、社會全般は有ゆる危險に對し屈辱的な無防禦狀態に曝されるであらう<sup>2)</sup>」とさへ高唱してゐる。

然らばかかる土地細分の行はれる小農の支配的な國に於ける農業は、如何なる狀態に導くであらうか。ベルンハルデイの見解によれば、小農は大農と同様な粗放的穀作經營を行ふを得ない。小農は狭小なる土地に於て生活を支ふるため、勞働力を集約的に投下し得る園藝的作物栽培に移らざるを得ない。かかる傾向に對し「無條件なる満足を表し得るためには、吾々は生産される財貨の性質や使用價值に對し考慮することなく、一國の總所得は、種類の何たるを問はざる價値の總量より構成され得ないことを、忘却せなければならぬであらう。例へば全國民は單に朝鮮薊又は茜草ばかりを需要するものではない<sup>3)</sup>」。だから一國の統制經濟内に在つては、かかる園藝的栽培に従事する小農經營の存在は、之を限定せなければならぬ。かかる小農經濟が存在する前提としては、同時に大量的穀物生産を行ふ大農が並存するを要すると論じてゐる。

更に小農は副業によりて其の勞働力を充分に利用し、またその所得の不足を補ひ得ると論ずる者もある。而して此の際かかる副業を構成するものは、日傭出稼と家内手工業とである。併し一

1) Bernhardt, a. a. O. S. 416.  
2) Bernhardt, a. a. O. S. 417.  
3) Bernhardt, a. a. O. S. 447.



國の土地全部が小農に細分され、かかる小農は辛じて一家の生計を支へるに足る食料品を生産するに過ぎないならば、小農は右の如き副業に依頼し、熱心に之に従事することは不可能となる。蓋しこの場合には、小農の餘剩勞働を雇傭する大經營もなく、また彼等の副業品を買取つてくれる他の産業従業者も見當らないからである。小農達は副業製品を外國へ輸出しやうとするも、彼等にはそれすら行ふべき資金が缺如してゐる。<sup>1)</sup>

かかる弊害こそ、正にベルンハルディが念頭に置く、土地細分と小農とが齎す結果である。彼は更に土地細分が極端に行はれ場合に起る過小農の弊害を痛撃する。小農は大なる總收益を擧ぐるといふも、果して之は實際の所得たるや否やを吟味せなければならぬと彼はいふ。「即ち一國民の資本は勿論消耗によりて減少する。現存資本からは、啻に其の效用ばかりでなく、其の消耗もまた、この資本の力で作られた生産物の内に移りゆき、この生産物の内で消盡される。かく失はれたるものの補充が忽にされ、不利な事情によつて之が許されない場合には、人類自身によりて作られたる資本の一部は漸次消滅し、遂に救済出來ぬやう缺乏することとなる。<sup>2)</sup>」小農に於てはかかる過程は掠奪耕作によりて行はれる。即ち小農に於て地力の補給をなさず、年々同一農地に於て同一作物を繰返し栽培するとき、農産物の形で、地力とそれが作出せる資本力とは消盡されることとなり、結局「現在に未來を犠牲として生存することとなる」<sup>1)</sup>。

かくの如くベルンハルディは土地細分によりて惹起される過小農の弊を説く。然らば彼は具體

1) Bernhardi, a. a. O. S. 449. 450.

2) Bernhardt, a. a. O. S. 444.

3) Bernhardt, a. a. O. S. 445.

的に如何なる農地を以て、過小農地と考へたるか。彼によれば「土地所有の細分が極度に行はれその結果として、その土地（農場）の上に生活する家族の勞働力が、其の土地に於て十分に利用され得ない」<sup>1)</sup>場合を指してゐる。而して斯る過小地に於て一家の生計を支へんとすれば、勢ひ極端なる勞働集約を行はざるを得ず、從て勞働力の濫費を惹起せざるを得ないこととなる。氏は斯る状態を以て「自然的に最も惠まれたる世界の諸國に於ても、一般的貧窮を惹起する所の最惡の濫費である」<sup>2)</sup>と道破してゐる。しかも「かかる土地細分は屢々必然の結果として、其の土地から獲得し得る農産物の分量が許容し、若しくはこの場合充分なる仕事を見出す以上の過剰人口を齎す」<sup>3)</sup>ものたることを附言してゐる。

ラウが過小農地に於ては比較的高き小作料と地價とが支拂はれる事實よりして、過小農の純收益大なることを主張し、「經驗の示す所によれば小農地に對し比較的高き小作料が支拂はれる。同様に大農地を多數の小農地に分割することによりて、より高き賣價が獲得される。この點に、ある限度迄は土地の細分に伴ひ、その純收益が増加するものであるとの主張に對する、充分なる證據が見出される。蓋しこの事實は、小作希望者達の烈しい競争から説明すべきであるとしても過小小作地に於ては大農地に於けるよりも、一モルゲン當りより高く支拂はれることは、小作人はこの場合損失を蒙らず、どうにかやつて行けることを前提とするからである。純收益が同一であるならば、大農地の小作人は此の競争關係が與へる利益によりて速に裕福となる筈だが、事實

1) Bernhardi, a. a. O. S. 454.  
2) Bernhardi, a. a. O. S. 446.  
3) Bernhardi, a. a. O. S. 450

は全く之に反してゐる」<sup>1)</sup>とて、寧ろ小農地に於ける純收益の大なることを主張するに對し、ベルンハルディは次の二つの理由から之に反對してゐる。即ち先づ第一に各小地片の小作料は、大農地の小作料よりも、一般に相對的に高いとするも、之は所有地の細分に伴ひ純收益が増加するためによるものではない。即ち個々の小地片は、それが獨立的に經營されるから、賃借されるのではなく、その小作人は他に經營地を有するが、そのみを以てしては自家の經營資本と勞働力とを充分に利用し得ないからである。小作人が斯る小地片を賃借するのは、就中、他に利用の道なき自家の勞力と資本とを利用するためであり、且つ此の新借地を經營するには、從來の經營資本、役畜及び農具を以て足るからである。これが彼をして大農地に對するよりも相對的により、高い地代を支拂はしめる理由である。<sup>2)</sup>

第二にラウの主張する如く、小農地に對する小作料及び價格の高率なることより、小農の純收益多きを主張するは妥當でない。小農地の所有者又は小作人が大なる純收益を擧げ得るのは「彼等が人一倍勞働に精勵するためばかりでなく、更にその生活を極度に切りつめることに基くものである」<sup>3)</sup>。小農生産を特に有利とするを正當であると信することは、實は獲得される所得分配の最も不利なることを語るに外ならない。小農地の賣價が高いのは、所有地の細分に基く所の國民資本の價值増殖を證明するものではない。かくしてベルンハルディは小農に於て支拂はれる高率なる小作料は、小作人の人一倍の精勵と人間らしからぬ生活から生ずるものなることを正しく認

1) Bernhardt, a. a. O. S. 458.  
2) Bernhardt, a. a. O. S. 466.  
3) Bernhardt, a. a. O. S. 461.

識してゐる。

かくて極端なる土地細分の進行により、漸次に農業資本は消耗され、役畜、家畜、農具も消失し、大犂の代りに鋤ばかりが使用され、動物力の代りに人間労働が虐使され、労働者は力と時とを充分に活用する機会を失ひ、ただ人口と貧窮のみが同一步調を以て増加すに過ぎないこととなる。「かくて他の何等かの施設を講ぜざれば、農民は人口供給源泉者としての性質を失ひ、従て國民道德の涵養者、國防擔當者たる資格を失ふこととなる。如何なる勇氣と氣力、精神財を求め、ため闘ふべき如何なる意志、自己を防衛すべき如何なる能力が、かかる國民から期待されやうか」<sup>1)</sup>。

## 六

上述の如くベルンハルディは一國の農地が少數の巨大所有地に分割される状態、竝に一國の農地が過小農に細分される状態の弊害を論じてゐるが、その所論は概ね正鵠に當つてゐる。更に彼は積極的見解として、大農、中農、小農の混在を以て理想とし、しかもこの混在に就ても中農の支配的なる状態を以て、政治上、經濟上最も健實なるものとしてゐる。この事情の下に於ては、農業生産は最も多面的となり、最も大なる發達を遂げ、國民所得の分配は最も公平に行はれ、同時に文化の發達を促し、國民食糧も確保されとする<sup>2)</sup>。かくして國民經濟に對しては、最大總所得を與へることとなり、然かも此の所得分配は公平となり、この所得は國民資本を損傷することな

1) Bernhardi, a. a. O. S. 474.  
2) Bernhardi, a. a. O. S. 474.

くして獲得されることとなる。併しベルンハルディは大地主の所有地を以て大農經營と考へるものであるから、彼の所論は眞の意味に於ける大農經營と小農經營との比較論ではなく、從て大農經營の擁護は、やがけ大地主の存續擁護に墮するを免れ難い。

翻つて本邦農業の實狀を見るに、小農經營が支配的にして、然かもベルンハルディの高唱する如き耕地の著しき細分を示し、勞力の浪費と勞働能率の低下の傾向を顯著に示してゐる。土地狭くして人口多き本邦に在つては、ベルンハルディの指摘する如き過小農の弊害を惹起し易い。然かも今日の資本主義經濟の下に於ては、小農の運命は彼等の耕作する農地の廣狹の外に、彼等の入込める農業生産關係と之を根柢とする市場關係の如何によつて左右される所が大きい。彼等の經營の目標たる永續的最大限度所得の獲得も、またこの社會關係によりて制約される所が大であると謂はざるを得ない。